



スクールカウンセラー2年目の私

小林 一郎

— 会員の自由な投稿のひろば —

5年前に高校教員を定年退職した私は大学院修士課程を経て、臨床心理士資格を取得し、スクールカウンセラーとして2年目を迎えています。

現在中学校2校と高校1校でスクールカウンセラーとして勤務しています。勤務日数は年間で62日です(中学校が30日勤務と15日勤務、高校が17日勤務)。長期休業中を除けば平均して週2回弱の勤務になります。自治会の仕事等の関係で勤務日数を抑えてきましたが、来年度からは週3日勤務したいと希望を出しているところです。

勤務時間は中学校が10時～16時45分、高校が10時55分～17時55分で、6時間勤務(+休憩時間)となります。実際には放課後の面談が入ると面談記録の作成を含め、退勤が18時を回ることもあります。

特に中学校で感じることですが、私の退勤時刻には教職員が部活動や諸業務で忙しく立ち働いています。教職員の過重労働が今さらながら注目される昨今、申し訳ないような気持ちを感じながら、退勤しています。

スクールカウンセラーの業務は当然のことながら、生徒、保護者を対象にしたカウンセリングおよび教職員との協働なのですが、肝心のカウンセリング件数は少ないです。中学校では来談者がゼロという日も少なくありません。これはカウンセラーとしての存在意義を疑われかねない事態ですので、どうしたものかと思案しています。

高校ではそこまで少なくありませんが、1～5名くらいの来談者数です。また、中学校では先生方の勧めに従って来談する生徒がほとんどですが、高校生はみずから面談を申し込むケースもあります。

来談件数で比較的多いのは、中学校では「いじめ」の被害相談、同級生との不和などです。

不登校生徒の保護者もときどき来談されます(不登校生徒はそもそも学校に来ていないので、面談ができない)。高校生では同級生との人間関係に関する悩みが多いです。

高校教員だった私にとって新鮮だったのは「特別支援学級」の存在です。これは「情緒学級」と「知的障害学級」の二手に分かれます。「情緒学級」は主に自閉症ではあるが知的な遅れがない生徒を対象にしています。自閉症児は人間関係や感覚過敏などに問題をかかえている場合がありますが、多くの生徒は高校に進学します。この子たちを迎え入れる高校の側にも、それ相応の心構えと体制的な備えが必要だと感じます。

また、中学校では「学習室」などで過ごす「別室登校」の生徒がいますが、高校ではこうした登校スタイルは認められていません。この点も大きな違いです。

スクールカウンセラーを迎え入れる教職員の側にも、さまざまな受け取り方があるように思います。多忙な業務に追われる教職員にとって、ときどき勤務するスクールカウンセラーは、どうしても「外来者」と思われがちです。この点も、こちら側のさらなる努力が必要な部分だと思います。

さて、まだ駆け出しのカウンセラーですが、私なりに工夫していることがあります。「スクールカウンセラーだより」を毎回発行していることです。幸い、生徒や保護者、教職員からも好意的な感想をいただいています。内容的には、身近な話題、社会的な事象など、多様な材料を心理学的な知見をからませながら書くようにしています。生徒・保護者・教職員へアプローチするための足掛かりとして位置付け、毎回結構楽しく作成しています。

今回は以上です。また、寄稿の機会をいただければ、ありがたく思います。